

ニーチェにおける雨傘の問題

清水 真木

1. 不可解な断章

1881年秋に成立したと推定されるニーチェのノートNV7.のあるページには、「『私は雨傘を忘れた』」(„ich habe meinen Regenschirm vergessen“, KSA9.12[62])¹⁾と記されている。引用符で囲まれた5つの単語は孤立した形でノートに記されていたのであろう、グロイター版全集の編集者たちがこれを孤立した断章と考え、独立の番号を与えているのを、ニーチェの読者は確認することができる。

もっとも、「私は雨傘を忘れた」というのは、2つの意味において不完全な文である。最初の単語ichが小文字で始まっているからであり、最後の単語vergessenのあとに句点が打たれていないからである。厳密に考えるなら、「私は雨傘を忘れた」は、5つのドイツ語の単語からなる文字列に過ぎないことになる。もちろん、この文字列は、恐らく、1つの文を書き記すという意図に基づいてノートに記されたものなのであろう。しかし、「私は雨傘を忘れた」という文字列の背後に有意義な文を書き記す意図を認め、これを不完全な文として理解することが妥当であるとしても、それにもかかわらず、この文が意味するものが明らかになるわけではない。

そもそも、「『私は雨傘を忘れた』」という断章は、私たちの目に触れるた

グロイター版全集の編集者たちは、独特の編集方針に基づいて、ニーチェの手稿を刊行してきた。この編集方針に従う限り、ニーチェの手稿に記された断章は、哲学的な意味を持った断章と単なるメモに区分されねばならず、このうち、全集に収録されるのは前者のみでなければならない。言い換えるなら、ニーチェの思想の理解にとって役に立たないと思われるメモの類は、印刷に付されてはいないことになる。さらに、哲学的な断章も、すべてが収録されているわけではない。手稿に書き記されている断章のうち、公刊された著作に収められている断章と比較して表現以外の点において差異が認められないものは、全集には収められていない。また内容の点では同一で、表現についてのみ差異が認められると編集者が判断した複数の断章が見出される場合にも、成立時期のもっとも遅い断章のみが収録され、それ以外の断章は、収録された断章のヴァリアントと見做されて取り除かれる。これらの断章は、各部門の『編集報告』の分冊にその存在が記されているに過ぎないのである。

それゆえ、グロイター版全集の編集者たちが問題の断章を印刷に付した以上、彼らは、第1にこの断章がニーチェの思想の理解に貢献するものであると判断したことになり、第2に、これ以後に記されたニーチェの手稿の中に、重複するものを持たないと理解したことになる。もっとも、平均的な読者にとり、「私は雨傘を忘れた」という平凡な事実判断がニーチェの思想の理解をいかなる点において促進することになるのか、必ずしも明らかではない。ニーチェが「雨傘を忘れた」という事実と、ニーチェが哲学者として書き残したものの内容とのあいだの関連は、誰にとっても理解し得るものではないのである。実際、グロイター版の編集者たちもまた、「『私は雨傘を忘れた』』というこの断章がこれら2つの条件を満たしているという判断の根拠に関し、現在までのところ沈黙を守っている。

従って、ニーチェの読者にとり、「私は雨傘を忘れた」というこの平凡な事実判断が何らかの価値を担うものであるとするなら、その価値は、ニーチェによって書き残されたものであるという事実のみ依拠するものである

ことになる。そして、さしあたり、「私は雨傘を忘れた」という断章が記された文脈を特定するための文献学的手法がかりが欠けている以上、デリダによって試みられたような解釈もまた許容されねばならないことになる。

2. デリダの場合

「私は雨傘を忘れた」というこの断章が記されたのは、1881年に『曙光』が刊行されてから1882年に『悦ばしき知識』が刊行されるまでのあいだの時期であった。そして、グロイター版全集のうち、『悦ばしき知識』とその前後の時期の遺稿は、フランス語訳がドイツ語版よりも先に刊行された²⁾。問題の断章がドイツ語圏の読者の前に姿を現したのが1973年であったのに対し、すでに1967年に、この断章は、フランス語訳の形で公表されている。その5年後の1972年には、この断章が何を意味するのかという問題に答を与える試みがデリダによって行われた。フランスで開催されたあるシンポジウムの席上、ジャック・デリダは、「ニーチェと文体の問題」という文章を発表し、そこで「『私は雨傘を忘れた』」という断章に言及する。

シンポジウムから6年を経た1978年に『衝角』(*Éperons*) という表題を与えられ単独の書物として公刊されたこの文章のうち、「『私は雨傘を忘れた』」(*«J'ai oublié mon parapluie»*) という表題を持つ一節は、問題の断章の解釈には、ある特殊な態度が必要であることを主張する。

デリダは、この文を読解し、その意味を推測することが可能であることを否定しない³⁾。しかし、「私たちは、ニーチェがこれらの語を書き記すことによって何を行いたいと思っていた(*voulu faire*)のか、何を主張した(*voulu dire*)のかが判ったと確信することはないであろう⁴⁾」とデリダは言う。そもそも、デリダによれば、「私たちは、何であれニーチェが欲した(*voulu*)のかどうか判ったということすら確信することはないであろう⁵⁾」という推測、あるいは、「恐らく、ニーチェは何も主張しなかったのであろう、あるいは、恐らく、彼はほとんど何も主張しなかったのであろう、あるいは、恐らく、彼は何を主張してもよかったのであろう、あるいは、恐らく、彼は何かを主

張するふりをしたのであろう」⁶⁾ という推測すら十分可能である。デリダは言う。

私たちには、決してそれが判らないであろう。少なくとも私たちには、決してそれが判らないのであり、この不可能、この無能力を考慮しなければならない。⁷⁾

さらに、デリダによれば、「私は雨傘を忘れた」という文は、あらゆる解釈に余地を残しているにもかかわらず、結局「循環的な行程の上を引きずられることもなく、その起源と終末とのあいだの適切な道筋の上を引きずられることもない。」⁸⁾ この文は、「あらゆる生き生きとした意味(vouloir-dire)から構造の点で解放されているから、何も意味しないことが可能なのであり、確定し得る意味を持たないことができるのであり、意味で遊ぶことでパロディ風のものを作ることもできるのであり、文脈に支配された全体、あるいは、有限なコード全体の外へと、接ぎ木(greffe)によって果てしなく逸脱して行くことも可能である。」⁹⁾ そして、デリダは、自らが試みる解釈自体、このような「接ぎ木」の試みに他ならないと告白している¹⁰⁾。

デリダは、ニーチェ解釈との関連において、たとえ『私は雨傘を忘れた』という断章が本来位置を占めるべき文脈が文献学的に明らかになったとしても、この断章が内的小よび外的な文脈から孤立した形で記されたものであるという事実に変化はないことを主張したのである。

ところで、この事実の上での可能性は、……全体として、また同時に永久に他の文脈を持たずに、単に生産の環境から切り離されたままであるばかりではなく、ニーチェのすべての意図あるいは意味からも切り離されたままでもあり得ることを妨げはしないであろう。というのも、ニーチェのこの意味とこれに適合する署名は、私たちには、理論上接近不可能なものだからである。¹¹⁾

デリダのこのような解釈に対し、伝記的な事実に基づいて文脈を再構成することによって反論することは可能であるし、デリダの言葉を無視することもできる。

秋、ニーチェがジェノヴァで使用していたものである。従って、問題の断章も、ジェノヴァで記されたと推測することができる。

雨傘を持たずに散歩に外出したニーチェは、散歩の途中で俄雨に襲われ、雨傘を持って来るのを忘れていたことを思い出したのかも知れない。そして、この断章は、雨雲で覆われた秋の空の下で記されたのかも知れない。

ニーチェは、1879年夏、健康上の理由でパーゼル大学を去ってから、1889年1月初旬にトリノにおいて精神錯乱に襲われるまでの約10年間、体調に合った気候の土地を求めて、主として南ヨーロッパ各地を短期間のうちに繰り返し移動する生活を続けた。1879年から80年にかけての冬、ニーチェは、郷里のナウムブルクにいた。ニーチェの健康状態は、この時期もっとも深刻な状態にあった。ニーチェが死んだという噂が知人たちのあいだに広まったのは、この時期である¹⁴⁾。

…… 父の人生が下降としたのと同じ年齢のとき、私の人生も下降した。すなわち、36歳の年に、私は生命力の最低点に到達した。

私は依然として生きてはいたが、自分の目の前の3歩先も見えなかった。その頃 1879年であった 私はパーゼル大学の教授職を放棄し、夏のあいだずっとサン・モリッツで影のように暮らし、翌年の冬、つまり私の生涯でもっとも日の光に恵まれない冬をナウムブルクで影として過ごした。このときが私の極小点であった。『漂泊者とその影』はその間に成立した。疑いもなく、私は当時影というものに通暁していたのだ。(KSA6.246f.)

1880年の春から夏にかけて、ニーチェは、年下の友人ペーター・ガストの招きでヴェネチアに滞在し、その後、暑さを避けて、ボヘミアの保養地マリーエンバートへと移動する。1880年秋、ニーチェは初めてリヴィエラの西の端に位置するリグリア地方の中心都市ジェノヴァを訪れ、ここで冬を過ごすことに決める。ニーチェは、1881年から82年にかけての冬と、1882

年から 83 年にかけての冬にも、ジェノヴァを訪れることになる。

しかしながら、ニーチェが書簡において知人たちに報告していることを文字通り信用するなら、少なくとも 1881 年 10 月、ニーチェがシルス・マリアを去ってジェノヴァに到着したあとの数週間は、天候が不順であった。ニーチェは、10 月 21 日付の母と妹に宛てた葉書に次のように記している。

..... 本当は季節はもう冬なのです。凍えるような雨が降っていて、まるで嵐です。私は、これからやって来るものが怖ろしいのです。ことによると、それは厳しい冬なのかも知れません。それに、私はと言えば、またしてもストーブがないのです。..... (KSB6.135)

また、10 月 29 日付の母と妹に宛てた葉書において、ニーチェは次のように報告する。

..... 毎日が惨めな状態で、毎日が闘いです、まったく信じられないような天気です！ここでは、エンガディーンの夏よりも穏やかに暮らせると私は思い込んでいました。しかし、苦痛は同じです。..... (KSA6.138)

ニーチェは、1884 年からはジェノヴァで冬を過ごすことを諦め、ニースへと移ることになる。ニーチェにとり、ニースの方がジェノヴァよりも湿度が低いように思われたからであろう。『この人を見よ』において、ニーチェは言う。

..... 新陳代謝のテンポは、精神の足が活発であること、あるいは麻痺していることに正確に比例している。「精神」そのものは、もちろん、この新陳代謝の一種に過ぎない。才気ある人々が現に存在している場所、あるいは、かつて存在していた場所、つまり、機

...

属していることを教える。

「忘れる」という動詞によって指し示される事態は、2種類に区分されるのが普通である。第1に、「忘れる」という言葉の指示対象には、記憶の不随意的な欠落、すなわち「失念」が含まれる。ニーチェの雨傘は、この意味において「忘れ」られたものであるように見える。それゆえ、上で試みられた推測が妥当であるならば、さしあたり、この文からは、ニーチェが雨傘を持って外出するつもりであったこと、ところが、実際には、ニーチェが雨傘を持たずに外出したこと、雨傘を携行する予定をニーチェが失念したということを知ることが可能となる。

しかし、第2に、ある対象から注意を自覚的に逸らすこともまた、「忘れる」という言葉によって表現される。考えごとをしながら散歩をしているときに、目の前で交通事故が起こったとする。そのとき、私は、考えていたことを一旦「忘れ」、交通事故に注意を集中させるであろう。

もっとも、日常的な言語使用の場面では、この第2の用法は、派生的なものとして見做されている。すなわち、注意を自覚的に逸らすことは、失念の一種として理解されるのが普通であり、第1の意味が、「忘れる」という言葉の本来の意味であると考えられることが多いようである。

しかしながら、第2の意味における忘却が本来的な忘却として理解されることもある。深層心理学は、忘却は、想起する能力の欠如や不注意に由来する偶然の出来事ではなく、動機を問うことが可能な、合理的に説明可能な行為と見做す。そして、失念の方は、この意味における忘却の随伴現象として説明される。例えば、フロイトは、忘却を次のように理解する。すなわち、忘却とは、表面的には失念であるように見える場合であっても、「失錯行為」(Fehlleistung)の1つに数えられねばならない。失念という事象は、心理学的には、自我の自己防衛の作用として理解されねばならないからである。そして、忘却される内容とは、思い出したくないこと、注意を向けたくないことに他ならない。第2の意味における忘却は、一種の「抑圧」(Verdrängung)として説明されることになる¹⁶⁾。

「私は雨傘を忘れた」という文によって表現される事態は、『日常生活の精神病理学』におけるフロイトの分類に従うなら、「計画の忘却」(Vergessen von Vorsätzen) に相当する。フロイトによれば、「注意力が足りないということは、それ自体として失錯行為を説明するのには十分ではないという主張を証明するのに、計画の忘却以上に相応しい現象のグループはない。」¹⁷⁾しかし、実際には、この種の忘却に限らず、「すべての場合において、忘却は、不快という動機に基礎を持つものであることが判る」¹⁸⁾のである。思い出すと不愉快な気持ちになるようなことや、不愉快なことを連想させるようなことを、ひとは忘れるのである。フロイトは言う。

自分の妻に文句をつけたり　友情がその反対物に一変してしまったり　医者として下した診断で誤りを犯したり　親しい付き合いを求めた相手からの拒絶に遭ったり　他人のアイデアを借用したりすること。忘却のいくつかの例を、選り好みせず集めてみると、その解明のためには、嫌なテーマに触れることが必要であるというのは、恐らくほとんど偶然ではあり得ないであろう。それどころか、私が推測するには、自分自身の忘却を動機の吟味に委ねようとする者は、私以外の誰であっても、不快なことの似たような見本のカードを描くことができるであろう。不快なことを忘れようとする傾向は、私にはとても普遍的なもののように思われる。恐らく、不快なことを忘れる能力は、さまざまな人々の許で、さまざまな形で、しかし十分に発達しているであろう。¹⁹⁾

さらに、忘却というこの「防衛機制」(Abwehrbestreben) は、神経症の患者のみならず、健康な人間の許でも容易に確認することが可能であり、しかも、「忘却は、重要ではないことについては許されているが、重要な事柄に関する忘却は、その事柄を重要ではないものとして扱おうとしていること、

従って、そうした事柄の重要性を否定する徴候である」²⁰⁾という洞察は、常識に属しており、それゆえ、忘却の背後には「無意識の動機」が潜んでいるという考え方は、決して特殊なものではないとフロイトは言う²¹⁾。

ある恋人がデートをすっぱかしてしまったとき、自分の相手の御婦人に「残念ながらすっかり忘れていたのです」と言って弁解してみても、無駄なことであろう。彼女は、間髪を入れず、この男に答えることだろう。「1年前でしたら、あなたはお忘れにならなかったことでしょう。あなたにとっては、私などもうどちらでもよしいわけですね。」……²²⁾

…… 同じように、観衆的な義務と、ハッキリとは語られない内心での評価の衝突によって説明されるのは、次のようなケースである。すなわち、誰か他の人に、その人のために実行してやろうと約束したことを忘れるというケースである。ここでは、いつも決まって正しいのは、ものを頼まれた方だけが、忘却の力によって赦されると信じているのであり、頼みごとをした方は、間違いなく正しい答を手に入れる、ということである。「あの人は、こういうことには興味がありません。そうでなければ、忘れてたりすることなどないでしょう。」……²³⁾

ハラルト・ヴァインリヒの指摘を俟つまでもなく、「なぜ忘れたのか」という問は、フロイトによって初めて意味を与えられたのである²⁴⁾。

4. 忘却の概念（続き）

ところで、忘却は、想起との関係において分類することも可能である。想起が適切に行われぬものと、想起が適切に行われるものに忘却を区別することができるのである。例えば、長く名前を思い出すことのなかった知人に

偶然再会したとき、その名前が自然に念頭に浮かぶ場合がある。このようなとき、想起は適切に行われたと見做される。これに対し、「私は雨傘を忘れた」という文が主題とするのは、自由な想起を妨げるタイプの忘却である。日常的な言語使用の場面において、「忘れた」が「思い出せない」という表現に置き換え可能であるという事実が如実に示しているように、忘却に何らかの動機が認められるということは、想起を妨げる理由が認められるということの意味する。それゆえ、想起が困難であるとしても決して不自然ではないであろう。

もとより、「私は雨傘を忘れた」という文が書き記されたとき、ニーチェはすでに自分が雨傘を忘れていたことを思い出している。すなわち、この文は、記憶が回復されたからこそ書き記すことが可能となったものなのであり、正確には、「私は雨傘を忘れていた」(*ich hatte meinen Regenschirm vergessen*)と表現されるのが相応しい事態であったことになる。しかしながら、ニーチェにとり、雨傘を手取ることは、外出のための準備の一部をなすべき作業であったのに、外出するときには、雨傘を携えるという要件の想起が、日常生活における便宜という観点からは適切に行われなかった。そのため、失われた記憶は、俄雨という雨傘を必要とする出来事に遭遇することによって初めて回復することになったのである。このようなことを、「『私は雨傘を忘れた』」という断章は物語っている。

さらに、忘却が惹き起こされたとき、雨傘を携行するという用件についての記憶が失われるとともに、この記憶の欠落が、ニーチェの気付かないうちに生じたということもまた、「『私は雨傘を忘れた』」という断章において問題となる忘却に特徴を与える要素であると考えねばならない。すべての失念において、記憶の欠落そのものを本人が確認することができないわけではないからである。失われた記憶そのものを思い出すことができず、しかも、記憶が失われたという事実を確認することが可能なような失念というものもあるのである。例えば、路上で偶然出会った昔の知人の名前をどうしても思い出すことができないという場合、名前に関する記憶を回復することはできな

いとしても、何らかの失われた記憶があるということ、そして、それが知人の名前であるということを確認することは可能である。

それゆえ、ニーチェ自身によって「雨傘を忘れ」ていたことが想起されるまで、ニーチェは雨傘を携行するという用件そのものを失念していたことになる。ニーチェは、雨傘を忘れていたことに気付いたときに初めて、自分の身に忘却という事態が生じていたことを初めて知ったのである。ニーチェにとり、記憶が回復されるまでのあいだ、想起のための努力を行うことは権利上不可能であった。予期せぬ俄雨に襲われることがなければ、ニーチェは、雨傘を忘れたことには永久に気付かなかったかも知れない。

5. ニーチェにおける忘却の機能

ニーチェは、雨傘を持って外出するつもりであった。しかし、ニーチェは、外出するときにこれを失念し、しかも、俄雨に襲われるまで、雨傘を置き忘れてきたことに気付かず、何かを忘れていることにすら気付いてはいなかった。雨傘の用途との関係では不適切な仕方によって、すなわち、俄雨に襲われることによって、記憶は回復され、ニーチェは、「『私は雨傘を忘れた』」と書き記す。「『私は雨傘を忘れた』」という断章が書き記された状況は、このようなものであったと推測することが可能である。そして、すでに述べたように、問題の断章において用いられた「忘れる」という動詞が指示しているのは、(イ)記憶の欠落であり、(ロ)自由な想起が妨げられた忘却であり、(ハ)記憶が欠落したという事実そのものについての自覚を欠いた忘却であったことになる。

そして、この「忘れる」という動詞は、問題の断章に対しニーチェの思想的文脈の内部に位置を与えるための最初の手がかりとなる。けれども、ニーチェは、忘却の意味をフロイトが忘却という防衛機制の目標とした、不愉快な気持ちの回避とは異質な機能のうちに認める。

ニーチェは、1887年秋に公刊された『道徳の系譜学』の第2論文の冒頭において、次のように言う。

…… そして、そうした忘れっぽさ(Vergessenheit)は、表面的なことしか判らない人々が信じているように、単なる慣性の力(vis inertiae)ではない。寧ろ、それは、一種の能動的で、もっとも厳密な意味において積極的な阻止の能力である。…… それによって直ちに察知され得ることは、忘れっぽさがなければ、幸福、快活、希望、現在というものは、決してあり得ぬということである。まさにこの必然的に忘れっぽい動物の許では、忘れることが強い健康の力と形式を表しているのだ ……。(KSA5.292)

上に引用した一節は、ニーチェが、忘却を否定的な事象として把握しているのではないことを教える。言い換えるなら、ニーチェにとり、失念という出来事は、孤立したものではなく、背後に潜んでいるもの、しかも、肯定的に評価されるべきものの反映として理解されねばならないことになる。ニーチェは、この一節において、失念の背後に自らが認めるものを「健康」(Gesundheit)と名付け、忘れっぽさが健康の証であることを主張している。言い換えるなら、ここでニーチェが「忘却」の名を与えるものは、健康な人間にのみ生じる出来事であり、それゆえ、忘れることができる人間とは、健康な人間に他ならないことになる。さらに、『道徳の系譜学』の第1論文には、「忘却」が「健康」ないし「強さ」の証であることを主張する次のような記述が見出される。

…… 高貴な人間のルサンチマンは、そのものとしては、実行に移され、すぐに反応することで使い果たされてしまう。だから、そのようなルサンチマンが有毒なものになることはない。他方で、ルサンチマンは、すべての弱者や無力な者たちの許では避けることができないような無数の場合に、まったく現れることがない。自分の敵、自分の災難、自分の非行そのものを長いあいだにわたっ

て真剣に受け取ることができないと言うこと　これが、強力で充実した本性の徴である。彼らは、造形力、補修し、治癒し、忘却させる力をありあまるほど具えている。(近代世界から1つ例を挙げるなら、その適当な例はミラボーである。彼は自分に加えられた侮辱や下劣な行為を何も記憶していなかった。彼が聞き流していられたのは　忘れたからである。)…… (KSA5.273)

もっとも、ニーチェにとり、すべてのタイプの忘却が健康な人間に固有の出来事であったわけではない。あらゆる種類の忘却を包摂するような仕方、「忘却とは何か」という問がニーチェによって定立されたことを示す証拠はないからである。それゆえ、ニーチェの著作や遺稿に見出される「忘れる」という動詞やその派生語のすべての用法、および忘却という事態に対してニーチェが下したすべての判断を、忘却をめぐるニーチェ固有の洞察に根を持つものとして理解することは困難である。ニーチェは、「忘却」という言葉を定義することにより、すべてのタイプの忘却を健康の随伴現象として説明しようとしたわけではないのである。

ところで、『道徳の系譜学』には、ニーチェが健康の証であると認める忘却の機能に関する次のような記述も見出される。

…… それ [= 忘却という阻止の能力] に帰せられねばならないのは、次のようなことである。すなわち、私たちの身体上の栄養摂取、いわば『身体の中に取り入れること』(Einverleibung) は、多様な過程の全体において起こるのだが、そのような過程が意識されないのと同じように、私たちによって体験され、経験され、私たちのうちに取り入れられる限りのものが、消化の状態(それを『心の中に取り入れること』(Einverseelung) と呼んでもよいであろう)において、私たちには意識されないということである。……意識の扉と窓をしばらくのあいだ閉じること。従属するさまざま

な器官という冥界が、たがいに協調したり対立したりしながら作用するときには生まれる騒音や闘争に煩わされないでいること。意識の少しの静けさ、少しのタブラ・ラサ、それによって、新しいもの、特に比較的高級な機能と器官のために、支配し、予見し、予定すること（つまり、有機体の仕組みは寡頭制なのである）のために場所ができるのだが　これが、すでに述べたように、能動的な忘れっぽさ、つまり、いわば心の秩序、落ち着き、礼儀作法の玄関番、管理人の効用なのである。……この阻止の器官が破損して止まってしまった人間は、消化不良を起こした者と比較され得る。（そして、ただ比較され得るだけではないが　）彼は何も『終わり』(fertig) にすることができない。…… (KSA5.291f.)

ニーチェは、上に引用した一節において、忘却の機能を「終わりにすること」に求める。ニーチェに従う限り、健康な人間に固有の出来事としての忘却の場合、何かを忘れるということは、何かを「終わりにする」ことを意味する。言い換えるなら、健康な人間にとり、忘却の第1の意味は、「終わりにすること」、言い換えるなら、想起によって補完される必要のある記憶の欠落とは異質な事態を指示するとニーチェは理解していたことになる。すなわち、　)健康の証としての忘却は、忘却の後に、想起の意欲を当人に惹き起こすような忘却ではないこと、　)記憶の欠落は、無意識のうちに行われること、さらに、　)忘却は健康によって要請される事態であるから、たとえ1度忘却されたものが何らかの事情によって想起されることがあるとしても、想起されたものが忘却されたものと同じ価値を持つことはなく、実践面での障碍以外の事情によって想起が促されることはないということ、上に引用した一節が告げる健康な人間に固有の出来事としての忘却のこのような指摘は、健康な人間に固有なタイプの忘却が「『私は雨傘を忘れた』」という断章において、「忘れる」という動詞が指し示していたタイプの忘却と同一のものであることを示していることになる。

6. 忘れられた雨傘

「『私は雨傘を忘れた』』という断章に含まれる動詞「忘れる」が指し示すのは、健康な人間に固有の忘却であった。それゆえ、雨傘を忘れた「私」は、健康な人間でなくてはならない。そして、雨傘を忘れたことは、健康の証として受け取られねばならないのである。

雨傘を忘れた「私」が健康な人間である以上、そのような「私」が忘れた雨傘は、健康な人間の許で忘却の対象となり得るような事物の集合に属していなければならない。表現を更めるなら、「私」が忘れた雨傘には、健康な人間によって忘れられるべきすべてのもの、「終わりに」すべきすべてのものが共有するある性質が具わっていたことになる。

ところで、すでに別の機会に述べたように²⁵⁾、ニーチェにとり、「健康な人間」とは「強者」の同義語であり、健康とは知的な意味における「強さ」に他ならない。「強さ」とは、ニヒリズムが真理であることを意欲し、生存への意欲を毀損するような遠近法の内部に敢えて身を置く強さである。生存を一層困難なものにするために自らが実験的に定立した「遠近法的仮象」を克服し、権力への意志を満足させることが強者の生存の目標であった。

健康な人間にとり、「終わりに」すべきものとは、すでに自らが克服したものであり、克服されたものとは、生存を困難にする機能をすでに失い、その使命を終えた遠近法的仮象である。それゆえ、健康な人間にとって、忘れることが「終わりにする」ことであるとするなら、健康な人間によって忘れられるものは、すでに機能を失った遠近法的仮象に他ならないことになる。もっとも、価値判断の合理的な基礎づけの不可能を主張するニーチェにとり、あらゆる判断は判断する主体の生の徴候である。各人が克服することによって満足を得る遠近法的仮象に求められる生存への意欲を毀損する程度は、各人の健康の程度に対応する。健康な人間のあいだに、克服されたもの、「終わりに」にされたものをめぐる一致した基準が設定されているわけで

はないのである²⁶⁾。

しかしながら、健康な人間である以上、誰もが等しく克服し、「終わり」にしなければならないものがある。それは、健康の対極にあるものとしての「病気」である。健康な人間とは、病者ではない人間のことだからである。病気とは、すべての健康な人間によって「終わり」にさせられたもの、健康である限りのすべての人間によって克服されたもの、それゆえ忘れられたものの名に他ならない。それは、いかなる意味においてももはや生存への意欲を毀損することのないもの、生存への意欲を毀損することがないという性質によって、人間をニヒリズムの実験から遠ざける有害なものであった。また、病気への配慮が忘れられることによって、何らかの不都合を経験することになるとしても、健康な人間にとっては、病気を患うことは、それ自体1つの実験であり、認識の手段に他ならず、従って、望ましいこととなる。ニーチェは、1886年に認められた『人間的な、あまりに人間的な』第1巻のための序文において、次のように言う。

途方もない信頼すべき健康が横溢しているときには、病気そのものを手放すことなど考えられない。病気が、認識を手に入れるための釣針のような手段として必要だからである……。(KSA2.17)

7. 転倒した見解

ところで、すでに1873年の『反時代的考察』第2篇「生に対する歴史の利害について」には、「健康」と「忘却」との関係への言及が見出される。すでにこの時期、ニーチェは、健康と忘却が不可分の関係にあることを強調しているのである。しかしながら、「生に対する歴史の利害について」におけるニーチェの見解と、ここに引用した『道徳の系譜学』の一節とのあいだには、無視することのできない差異が認められる。『道徳の系譜学』によれば、忘却は健康の証である。これに対し、「生に対する歴史の利害について」は、忘却が健康の必要条件であることを主張する。また、『道徳の系譜学』

に従う限り、忘却の対象となるのは、克服されたもの、「終わり」になったものである。しかし、「生に対する歴史の利害について」において、ニーチェは、克服することのできないものを視界から排除することが忘れることの機能であると主張するのである。

「生に対する歴史の利害について」によれば、動物は、記憶を把持する能力をわずかしか持たず、「非歴史的」(unhistorisch)に生きる。これに対し、人間は、動物ほど容易に忘れることができない。人間は、年齢を重ねるとともに、「過去の重荷」が大きくなり、その負担に苦しめられることになる。ニーチェに従うなら、このような重荷を負わないことが「幸福」の意味である。それゆえ、幸福を実現するためには、動物のように忘れることができなければならないことになる(KSA1.248f.)。ニーチェは言う。

..... しかし、もっとも小さな幸福でも、もっとも大きな幸福でも、つねにただ1点によって、幸福は幸福となる。それは、忘れることができるということ、あるいは、学問的に表現するなら、幸福が続いているあいだは非歴史的に感覚する能力である。すべての過去を忘れて瞬間の敷居に腰を下ろすことができない者、勝利の女神のように、眩暈も恐怖も感じることなく一点に立っていることができない者には、幸福とは何かということが決して判らないであろうし、さらにまずいことには、他人を幸福にすることは何もできないであろう。..... (KSA1.250)

さらに、ニーチェは、忘却することは、幸福の必要条件であるばかりではなく、生存一般の条件でもあることを主張する。

..... すべての行動には忘却が属している。それは、すべての有機体の生命に、光ばかりではなく闇も属しているのと同じである。1人の人間が徹頭徹尾歴史的にのみ感覚しようとするなら、それ

は、眠らないでいることを強いられた人間、または、ただ反芻するだけで、しかもたえず反芻を繰り返すことだけで生きるように強いられた動物に似てゐるであろう。それゆえ、動物が示しているように、ほとんど思い出を持たずに生きることが可能であり、それどころか幸福に生きることすら可能である。しかし、忘れることなく生きるということは、まったく不可能である。あるいは、私のテーマについてさらに簡単に説明すれば、不眠や反芻や歴史的感覚には、ある一定の限度があつて、この限度に達すると、人間であれ民族であれあるいは文化であれ、生命あるものは、傷つけられ、最終的には滅亡する、ということになる。(ibid.)

そして、ニーチェは、「どの程度まで過去を忘れ去るべきかという限界を設定する」(KSA1.251) という課題を自らに課す。ところが、この点に関し、「生に対する歴史の利害について」の記述には、混乱が認められる。一方において、ニーチェによれば、忘れ去られるべきものの限界は、人間や、民族や、文化が持つ「造形力」(plastische Kraft) の強さと相関関係にある。すなわち、優れた造形力を持つ者ほど、忘れ去るべきものの限界は、緩やかになるのであり、忘れ去るべきものの限界が存在しないほど強い造形力を想定することも可能である。強い造形力を持つ者ほど、多様な過去を引き受ける力が強いのであるから、忘却の機能に頼る必要が少なくなることになる。

1人の人間の内面の本性が強力であれば、それだけ一層、この人間は、過去を自分のものとしたり、奪い取ったりする。そして、もっとも強力でもっとも途方もない本性というものを考えるなら、このような本性は、歴史的感覚がはびこつて有害に作用する限界というものがこのような本性にはまったく存在しないという点で見分けられるであろう。すべての過去は、自分のものであれ、他人のものであれ、引き寄せられ、取り込まれ、いわば作り変えられ

て血となる。(KSA1.251)

優れた造形力を具えた者は、いかなることであっても克服し、同化することができる。従って、いかなる記憶も生命に有害に作用することはないのであるから、このような者にとって、忘却することは必要ではないことになる。ところが、ニーチェは、上に引用した一節に続けて、次のように言う。

このような本性は、自分が同化しないものを忘れてしまうことができる。そのようなものは、もはや存在しないのであり、地平は閉じていて完全である。そして、その地平の彼方に人間、情熱、教訓、目的が存在することを思い出させることができるものは何もない。そして、次のことは、普遍的な法則である。すなわち、すべて生きているものは、ある地平の内部においてのみ健康で、強力で、実りあるものになることができる。……(ibid.)

強力な造形力を具えた者は、すべての記憶を同化することができるから、忘却することを必要としてはいないはずである。しかし、この同じ者は、閉じた地平を形成することにより、同化することのできないものを視界から排除し、忘れることができる。「生に対する歴史の利害について」には、これら相反する見解が含まれていることになる。そして、この見解に従うなら、強い造形力を持たない者にとってこそ、多くを忘れることが必要であるのに、このような者は、地平を形成する能力が欠けているがゆえに忘れることができない、ということになってしまう。忘却は造形力の不足を補完するものであるのに、造形力が不足している限り地平を形成することができず、従って忘れることができないとニーチェは主張しているのである。これは、「どの程度まで過去を忘れ去るべきかという限界を設定する」というニーチェ自身が設定した課題が権利上遂行不可能であることを教えるものであり、「生に対する歴史の利害について」におけるニーチェの立場の混乱を反映するものであると考えねばならず、それゆえ、これ自身、ニーチェの知

的な病気の反映として理解されねばならないもののように思われる²⁷⁾。

8. 形式的な理解

健康であるとは、病気を忘れることである。1882年に公刊された『悦ばしき知識』の冒頭に置かれた「冗談、策略、復讐」には、次のような詩が収められている。

4. 対話。

A：私は病気だったのかな？

私は恢復したのかな？

それに、誰が私の医者だったのかな？

何とすっかり私はそうしたことを全部を忘れてしまったのだろう！

B：今私は、君が恢復したことがようやく信じられるようになった。

つまり、忘れた者こそ、健康なのだ(Denn ist gesund, der vergass.)。

(KSA3.354)

健康な人間とは忘れることができる人間であり、健康な人間が忘れるのは、「終わり」にされたもの、克服されたものである。健康な人間は、病気を克服することにより初めて健康になる。それゆえ、「『私は雨傘を忘れた』」という断章に含まれる「雨傘」という言葉は、ニーチェにとり、病気を連想させる道具、病気の記号であったと考えねばならない。

ニーチェの生活において、雨傘という道具は、身体的な健康に対する不安と結び付いていた。このことは、伝記的事実によって確認することができる。アドルノは、シルス・マリアを訪れたとき、土地の古老から聞いた次のような逸話を紹介している。

…… ニーチェは、雨のときも晴天のときも、赤い日傘²⁸⁾を携えていた。 思うに、ニーチェは、その傘に、自分を頭痛から

守ってくれる役割を期待していたのであろう。一群の子供たちが……面白がってやっていたことに、ニーチェの傘が畳まれているとき、これに小石を詰め込んでおくという遊びがあった。ニーチェが傘を開くと、その小石がニーチェの頭上に降ってくる。すると、ニーチェは傘を振り上げて脅かしながら、子供たちを追いかけて走るのだが、子供たちを捕まえたことは一度もなかった。……²⁹⁾

ニーチェは、1870年に看護兵として普仏戦争に従軍した際、赤痢とジフテリアに同時に感染し、それ以来、神経系統の以上を中心とする後遺症に苦しめられていた。雨傘の赤には、神経の予期せぬ異常を鎮静させ、これを治療する効果があるとニーチェは考えていたのであろう。ニーチェは、シルス・マリアで外出するとき決して手放すことのなかった雨傘をジェノヴァでも携えていたに違いない。ニーチェが「『私は雨傘を忘れた』」という言葉を書き記したとき、ニーチェが忘れたのがシルス・マリアの雨傘であったとしたら、雨傘を忘れたということは、病気に対する配慮を忘れたということではなかならぬ。病気に対する配慮を「終わり」にしたということ、これが「雨傘を忘れた」ことの意味なのである。「『私は雨傘を忘れた』」という文は、自らの失策を後悔しながら記されたのではない。反対に、雨傘を忘れたという事実は、病気との訣別を告げるもの、それゆえ、ニーチェにとって悦ばしい出来事であった。

ニーチェにとり、雨傘を忘れたことは、二重の意味において悦ばしいことであった。ニーチェは、自らの健康状態の悪化が、知的な意味における病気の反映であり、その帰結であると考えていた。

…… 当時私の許で明瞭になったことは、ヴァーグナーとの決裂というようなことではまったくない。 私は自分の本能の全体的な混迷を感じたのであり、個々の失策は、ヴァーグナーという名を持つとしても、パーゼルの教授職と呼ばれるにしても、この

全体的な混迷の記号に過ぎなかった。自分に対するある種の苛立たしさが私を襲ったのだ。……(KSA6.324)

それゆえ、雨傘を忘れたということ、言い換えるなら、身体の病気に対する配慮を忘れたということにニーチェが気付いたとき、それは、体調の変化の背後にある知性の健康状態の改善を意味するものとして受け取られたに違いない。「『私は雨傘を忘れた』」という言葉をわざわざノートに書き留める必要があったのは、雨傘を忘れたという事実の背後にある知的な意味における健康状態の変化が、哲学者としてのニーチェの根本問題だったからである。

すでに1873年から79年にかけて、知的な意味における病気からの回復を経験したニーチェは、1881年までに、もっとも健康な状態の形式的な理解に到達していた。「『私は雨傘を忘れた』」という断章が書き記される2ヶ月ほど前、1つの事件が起こり、ニーチェは、この事件を知的な意味における回復を告げるもの、実験的な、危険な生活を送ることが許されるようになったことを告げるものとして受け取る。1881年は、ニーチェが初めてシルス・マリアで夏を過ごし、そこで、もっとも健康な人間を選び出すための試金石となる遠近法的仮象、すなわち「等しきものの永劫回帰」の着想を得た年であった。「『私は雨傘を忘れた』」という断章がノートに書き記される約2ヶ月前のことである。

1881年8月14日付のペーター・ガスト宛ての書簡には、次のような言葉が見出される。

月日の経つのは早いもので、8月の太陽が私たちの頭上に輝いています。山や森には落ち着きと静けさがやって来ました。そして、私の地平線の上に上がってきたのは、いまだ見たこともないようないくつもの思想です。私は恐らくあと何年か生きなければならぬでしょう。ああ、友よ、自分がきわめて危険な生活を送って

いるのではないかという予感が、ときどき私の頭の中を駆け抜けて行きます。というのも、私を機械に喩えれば、その機械というのは、粉々になってしまうかも知れないような機械の仲間ということになるからです。私の感情が緊張するたびに私がぞっとさせられ、それとともに笑わせられるのはそのためです。すでに何回か、私は部屋から出られないということがあったのですが、それは、眼が炎症を起こしているという馬鹿馬鹿しい理由からでした。 どうしてそんなことになったとお思いですか。そんなときにはいつも、その前日の散歩の途中で流した涙があまりにも多かったのです。しかも、その涙というのは、感傷的な涙などではなく、歓喜の涙だったのです。(KSB6.112)

さらに2年後の1883年夏、再びシルス・マリアを訪れたニーチェは、ガスト宛の書簡において、次のように語っている。

このエンガディーンは、私のツアラトウストラ生誕の地です。私は、ツアラトウストラの中で一体となっているさまざまな思想のスケッチをやったのことで手に入れたのでした。このスケッチのしたには、次のように書いてあります。『1881年8月初め、海拔6000フィート、すべての人間的な事物からはさらに高く隔たったシルス・マリアにて』。(KSB6.444)

もっとも、ニーチェが実際に雨傘を持たずに外出したことを確認する手段はない。雨傘を忘れるということは、ニーチェが回復した知的な意味における健康の1つの帰結として要請されたものであったと考えるべきなのかも知れない。知人や友人に対し自らの病気を誇張して詳細に報告するニーチェ特有の悪癖を考慮するとしても、当時のニーチェが認めた書簡に従う限り、恐らく、ニーチェの健康状態は、雨傘を携行することを失念し得るほどには改

善されてはいなかったであろう³⁰⁾。「『私は雨傘を忘れた』」という断章は、自らに対する一種の予告ないし期待として書かれたのかも知れない。

引用符で囲まれていること、小文字で始まっていること、文末に句点が脱落していることの意味は、本来、これが間接話法の一部であったことを示唆しているのではないであろうか。そして、「私は雨傘を忘れた」という文を構成する5つの単語の前には、「～とすることができるとしたら」という言葉が省略されていることを示しているのではないであろうか。そして、問題の断章がこのように理解されるべきであるとするなら、ニーチェが自らの思想的な立場を語るために書き残した言葉はすべて、健康の形式的な理解に基づく読者への問いかけとして理解されねばならないのではないであろうか。

そして、「『私は雨傘を忘れた』」というこの断章は、自らの健康の将来における到達点を予め示すため、ノートの中に秘かに置かれた慎ましい標識のようなものだったのではないであろうか。

註

- 1) ニーチェの著作、遺稿、断片からの引用は、グロイター版 15 巻選集 (*Nietzsche Werke. Kritische Studienausgabe in 15 Bänden*, herausgegeben von Giorgio COLLI und Mazzino MONTINARI, Berlin, Walter de Gruyter, 1980.) から、書簡からの引用は、原則としてグロイター版書簡全集 (*Nietzsche sämtliche Briefe. Kritische Studienausgabe in 8 Bänden*, herausgegeben von Giorgio COLLI und Mazzino MONTINARI, Berlin, Walter de Gruyter, 1986.) から行い、著作、遺稿の場合には KSA の符号および巻数と頁数により、断片の場合には KSA の符号および巻数と断片番号により、書簡の場合は KSB の符号および巻数と頁数により、原則としてその都度本文中で行う。いずれの場合も、引用する綴りはグロイター版に従い、ニーチェによるゲシュペルトは太字で示した。
- 2) »Vorbemerkung der Herausgeber«, in: *Nietzsche Werke. Kritische Gesamtausgabe*, 5. Abteilung, 2. Band, herausgegeben von Giorgio COLLI und

Mazzino MONTINARI, Berlin, Walter de Gruyter, 1973, S.V.

- 3) DERRIDA, Jacques, *Éperons. Les styles de Nietzsche*, Flammarion, 1978, p.108.
- 4) DERRIDA, *ibid.*, p.104.
- 5) DERRIDA, *ibid*

- chronologisch geordnet, 4. Band, London, Imago Publishing, 1941, S.9, 267f.
- 17) FREUD, *ibid.*, S.168.
- 18) FREUD, *ibid.*, S.150.
- 19) FREUD, *ibid.*, S.160.
- 20) FREUD, *ibid.*, S.170.
- 21) FREUD, *ibid.*, S.162. この点に関連して、フロイトは、『善悪の彼岸』68番に言及し、次のように語っている。「我々全員の中で、ニーチェがそのアフォリズムの1つにおいて試みたほどに、忘却という現象とその心理学的な基礎づけとを余すところなく、しかも印象深く叙述することができた者はいない。」ニーチェは、『善悪の彼岸』68番において言う。「『これを私はしたのだ』と私の記憶は言う。そのようなことを私がしたはずはない　と私の自負は言い、頑として譲らない　ついに、記憶が譲歩する。」(KSA5.86) もっとも、「『私は雨傘を忘れた』』という断章が表現する事態は、このような意味における忘却ではない。
- 22) FREUD, *ibid.*, S.169.
- 23) FREUD, *ibid.*, S.172f. なお、フロイトは、度を越して物忘れのひどい場合でも、事情は同じであると主張する。すなわち、フロイトによれば、そのような人の忘却は、「他人に対して非常に大きな軽蔑の感情を無意識のうちに抱いていることが動機となって生じ、この種の人の場合は、たまたま忘れやすく生れついたという事実を、ただ利用しているに過ぎないと考えざるを得ない」のである。 cf. FREUD, *ibid.*, S.173.
- 24) WEINRICH, Harald, *Lethe: Kunst und Kritik des Vergessens*, München, C. H. Beck, 1997, S.252.
- 25) 清水真木、『岐路に立つニーチェ』、法政大学出版局、1999年、146頁以下。
- 26) 清水真木、前掲書、242頁以下を参照のこと。
- 27) 清水真木、前掲書、39頁。cf. KSA1.331ff. この事実は、1870年代の立場と1880年代の立場とのあいだの差異を反映するものとして受け取

られるべきであるように思われるが、その詳細な検討は、別の機会に譲る。

- 28) 厳密には恐らく晴雨兼用の傘であったと考えられる。というのも、雨天のときに日傘を拵げて雨を避けたと想定することは困難だからである。ある証言によれば、ニーチェがシルス・マリアで携行していたのは、「雨傘」とも「日傘」とも限定されない単なる「傘」であり、緑と青の木綿の裏地がついたものであった。 cf. RAABE, Paul, *Spaziergänge durch Nietzsches Sils-Maria*, Zürich, Arche Verlag, 1994, 3. Auflage, 1996, S.79.
- 29) ADORNO, Theodor W., »Aus Sils Maria«, in: *Ohne Leitbild (Gesammelte Schriften in 20 Bänden, Band 10-1: Kulturkritik und Gesellschaft I)*, Frankfurt am Main, Suhrkamp, 1997, S.328.
- 30) cf. JANZ, Curt Paul, *Friedrich Nietzsche. Biographie*, Zweiter Band, S.95; KSB6.140, 151, 152, usw.

Das Problem des Regenschirms bei Nietzsche.

Maki SHIMIZU

Die von Derrida 1972 vorgelegte Frage nach dem Sinn von einem rätselhaften Fragment „„ich habe meinen Regenschirm vergessen““, das Nietzsche im Herbst 1881 in ein seiner Notizbücher eingeschrieben hat, ist zugleich die nach dem Grundcharakter des gesamten Diskurses von Nietzsche. Nietzsche hält (gleich wie Freud) das Vergessen als etwas Positives, dessen primäre Bedeutung aber im „Überwinden“ oder im „Fertigwerden“ liegt; und was der gesunde Mensch vergißt, ist nichts anderes als das, was Nietzsche als (ebenso intellektuelle wie leibliche) „Krankheit“ bezeichnet, dessen Zeichen der von Nietzsche (wohl in Genua) vergessene Regenschirm sein muß. Dass der Regenschirm für Nietzsche ein Zeichen der Krankheit ist, womit er fertig wurde oder wenigstens fertig zu werden wünschte, kann man es in bezug nicht nur auf seine Kondition, sondern auch auf sein Denken mit dem Biographischen parallel bestätigen. In jenem Sommer hatte er zum erstenmal den Begriff der „ewigen Wiederkunft des Gleichen“ für sich explizit dargestellt, eine experimentalphilosophische Hypothese und Proberstein, womit man gesundste und stärkste Menschen aussieben soll: wenn für Nietzsche „seinen Regenschirm vergessen“ „mit seiner Krankheit fertig werden“ heisst, würde doch seine Kondition es ihm nicht erlauben; und das Fragment (und sein gesamter Diskurs) könnte man als ein Ausdruck der freudigen Hoffnung auf die zu kommende leibliche „Genseung“ verstehen.